

障害種の異なる教員と子どもの係わり合いについて

—聴覚に障害のある教員に視点を当てて—

○石川 美希 藤島 省太
 (宮城教育大学教育学研究科) (宮城教育大学)

KEY WORDS: 共生社会 係わり合い

(目的)

平成 24 年 7 月 23 日に文部科学省が出した「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」(報告)の中で、『共生社会』とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。このような社会を目指すことは、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題である。」という記述があり、『共生社会』の実現のためには「障害のある者が教職員という職業を選択することができるよう環境整備を進めていくことが必要である。」さらに、「児童生徒等にとって、障害のある教職員が身近にいることは、障害のある人に対する知識が深まるとともに、障害のある児童生徒等にとってのロールモデルとなるなどの効果が期待される。」と提言されているが、異なる障害のある人同士については触れていない。

『全国聴覚障害教職員協議会組織部』の「現勢調査 (2016 年度)」によると、現在聴覚障害教職員の総数は 454 名で、その内聾学校に勤務している聴覚障害教職員は 347 名、養護学校 68 名、盲学校 1 名、通常校 27 名、大学 11 名となっている。これらのデータから、現在聴覚障害教職員は聾学校のみならず養護学校、盲学校にも在籍していることが読み取れるが、聴覚障害教職員がどのようにして自分と異なる障害のある児童生徒と係わっているのか実態は明らかにされていない。

特別支援教育は共生社会の形成の基礎となるものであり、平成 19 年に「特殊教育」から「特別支援教育」への移行がなされたことで、障害の種類・程度に関係なく子どものニーズに合った教育をすることが重視されている。したがって、聴覚に障害のある教員も他の障害を抱える子どもに対応できる力が求められているといえる。

そこで、本研究では、そうした実態を明らかにするとともに、聴覚に障害のある教員に視点を当てた異なる障害のある人同士の係わり合いについて検討することを目的とする。

(方法)

実際に聴覚支援(聾)学校以外の特別支援学校に赴き、そこに勤務している聴覚に障害のある教員を対象とし、2017 年 1 月中旬に A 特別支援学校、B 特別支援学校 2 校を訪問し、聴覚に障害のある教員(a、b)の授業見学・インタビューを行なった。授業見学は筆記記録、インタビューは対象者の了承を

得てビデオ記録で記録した。インタビューにおいては対象者の基本情報に関するもの(1~5 項目)と対象者の視点に当てた現場の実態を把握するためのもの(質問項目 6)、異なる障害のある人同士の係わり合いに対する対象者の捉え方を調査するためのもの(7~8 項目)からなる質問項目を構成した(表 1)。

表 1. インタビューの質問項目

| |
|---|
| 1. 教員になって今年度で何年目か |
| 2. 現在の学校は今年度で何年目か |
| 3. 聾学校での勤務経験はあるか |
| 4. 担当する学級 |
| 5. 本人の障害状況(聴覚障害以外の障害) |
| 6. 今の学校に勤務して良かったこと、困ったこと |
| 7. 聴覚に障害のある教員が自分と異なる障害のある生徒と係わることにしてどう思うか |
| 8. 聴覚に障害のある教員が聾学校以外の特別支援学校で働くことについてどう思うか |

(結果・考察)

インタビューで得られたデータを文字起こしし、対象者の回答内容を質問項目ごとに分けた。インタビューで得られた対象者の基本情報は表 2 の通りである。質問項目 6~8 においては内容ごとに区切ってそれぞれ具体的内容を抽出し、分類した(表 3)。インタビューの回答内容を見てみると両者とも生徒との係わり合いに困難を抱えていることが読み取れる。しかし、生徒との係わり合いは全て消極的ではなく、「生徒が先生とのコミュニケーション方法を考えてくれた」、「聾学校の生徒とは違った係わり方があるからすぐく勉強になるし、他の子どもと係わる時の参考になる」など積極的側面も見られた。また、環境整備についても通訳体制をはじめコミュニケーション保障等、職場におけるバリアフリー体制などの整備が不十分であることがうかがえた。

表 2. 対象者の基本情報

| | a 先生 | b 先生 |
|-------------|----------|----------|
| 教員勤務年数 | 3年以上 | 10年以上 |
| 現在の学校での勤務年数 | 1年 | 4年 |
| 聾学校での勤務年数 | 3年 | 8年 |
| 担当する学級 | 中学部 重複学級 | 小学部 重複学級 |
| 本人の障害状況 | 重度 | 重度 |

(今後の課題)

引き続き聴覚支援(聾)学校以外の特別支援学校に勤務している c 先生・d 先生の授業見学とインタビューを行なう予定である。合計 4 名のインタビューから得られた知見を基に、現場における課題を浮かび上がらせ、そうした状況への対応・改善の方策と異なる障害のある人同士の係わり合いで起きる困難を軽減するための手だてを検討していきたい。

(ISHIKAWA Miki, FUJISHIMA Shota)

表 3. インタビューの結果

| 質問内容 | カテゴリ | 具体的内容 |
|------|-----------|---|
| Q6 | 生徒との係わり | 生徒が先生のためにコミュニケーション方法を考えてくれた。生徒に先生を助けてあげようという気持ちがあるのは嬉しい。今の学校で学んだ事が聾学校でも生かせる。生徒との係わり方についてすごく悩んでいる。話しかけても反応がないときが多い。気持ちが通じるためにはどうしたらいいのかわからない。簡単な言葉・挨拶ならできるが、健聴者と比べて生徒と深い話ができない |
| | IT 関係 | IT の関係がうまくいかない。 |
| | 先生同士の話し合い | 先生たちの話し合いから省かれる。事後報告が多い。多人数の雑談がわからないのは辛い。聾学校にいた時よりも今の学校の方が職員室の雑談に入りにくい。会議の時、情報保障をつけてもらっているが、情報が足りない。会議などの多人数の話し合いに参加できない。事後報告が多いから悩んでいる。 |
| | 先生同士の情報共有 | 先生同士の情報共有ができていないと生徒の指導に困る。先生同士の情報共有ができていないと生徒を混乱させてしまうことがある。 |
| Q7 | 個人的か公的か | 異なる障害のある人同士の係わり合いは大事だと教育や医療など公的な場でかかわるのは別。公的の場で係わることにしては現状では配慮が不十分。 |
| | 教師と生徒の関係性 | 教師と生徒の気持ちの繋がり、お互い育つ関係が大事だと思っているが、難しい。 |
| | 考え方の変化 | 今の学校に来てから当たり前のことができなくてく慣れないと思うようになった。聾学校の生徒とは違った係わり方があるからすぐく勉強になるし、他の子どもと係わる時の参考になる。 |
| Q8 | 個人の意思尊重 | 個人の意思を尊重してくれれば反対しない。反対ではないが、個人の意思を尊重してほしい。 |
| | 聾学校への異動願望 | 私には聴覚に障害のある生徒に教える夢がある。3 年ぐらい今の学校で働いて、学んだことを聾学校に持ち帰りたい。 |
| | 周囲の理解 | 合理的配慮がないとまだと障害のある人が障害のない人と対等に仕事するのは難しいことを理解してほしい。聾学校にろうの先生がいらないのはおかし。 |
| | やりがい | 今の学校では行動範囲が狭いし、やりがいを感じないが、健聴者と対等に仕事ができたらまた変わっていったと思う。 |
| | 生徒の実態 | 様々な障害を併せ持つ子どもが増え、どう支援・指導をしたらいいのかかわからず先生たちに余裕がなくなってきた。 |